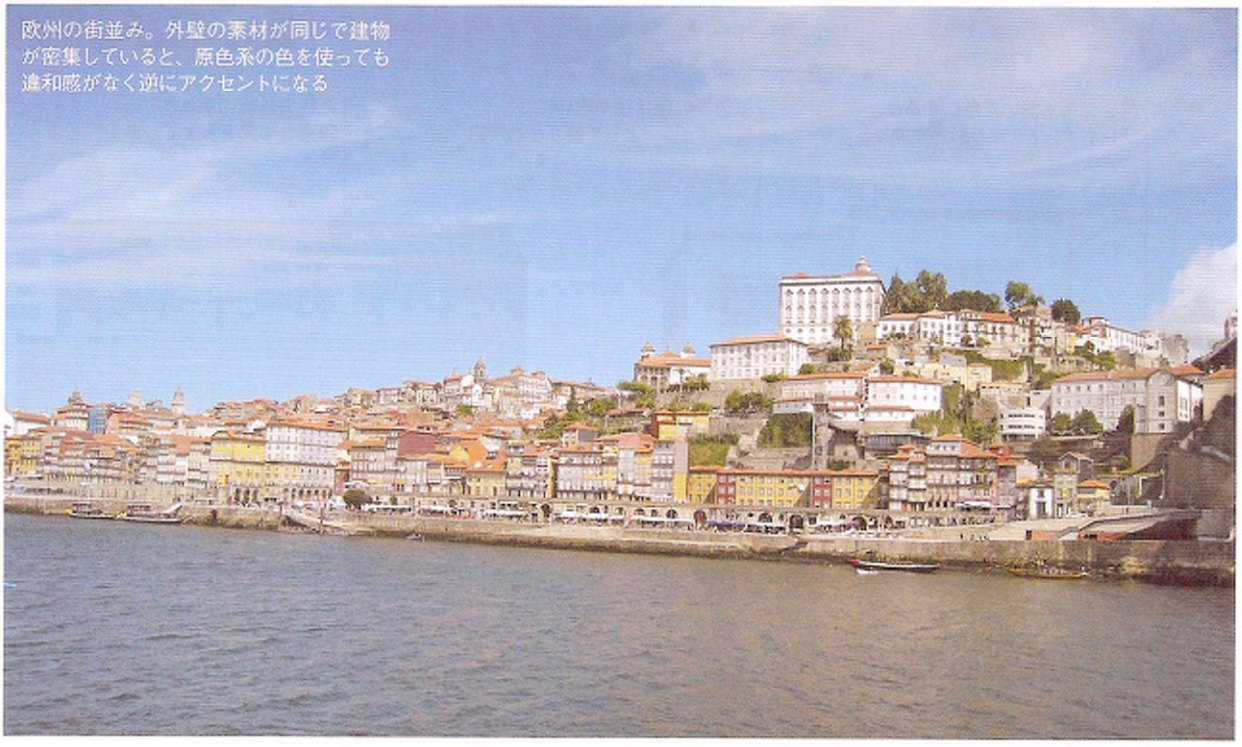


欧州の街並み。外壁の素材が同じで建物が密集していると、原色系の色を使っても違和感がなく逆にアクセントになる

本書監修者が語る家づくり

PART 2

美しく豊かな街並みは一人ひとりの意識から

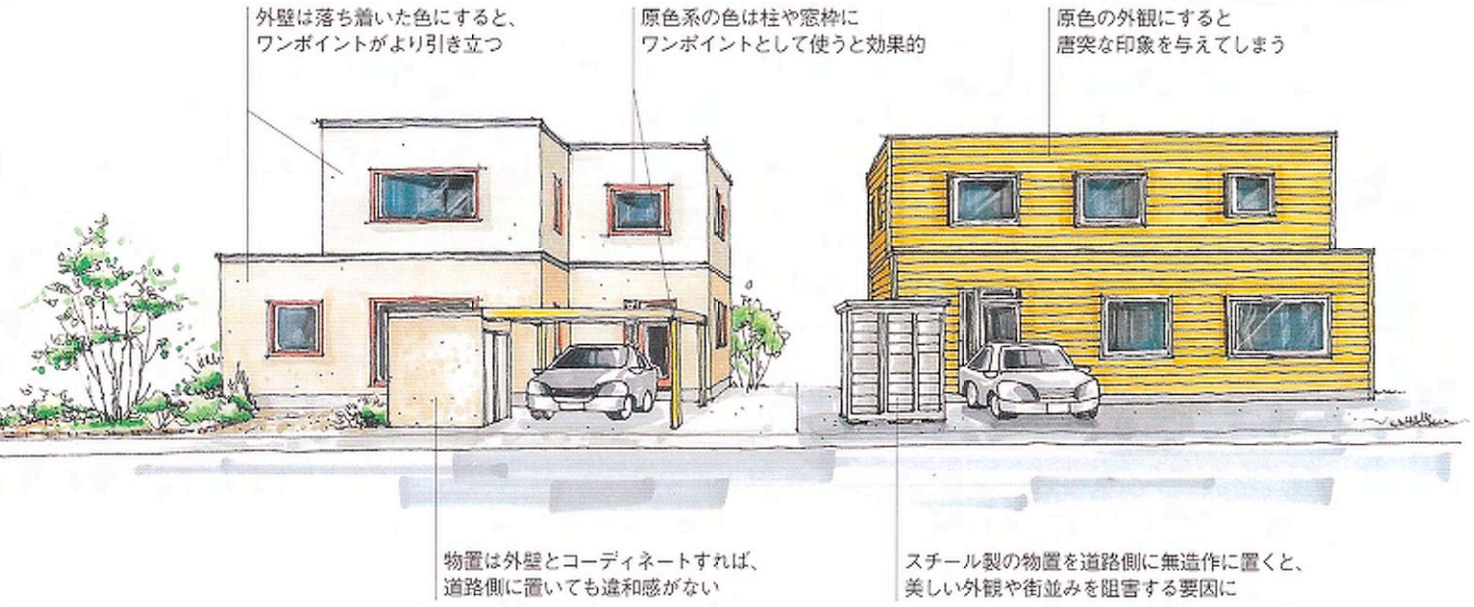
米光建築設計事務所代表 一級建築士 **米光研**

家は「公共物」という考え方

家を建てる場合、良好な住環境を保つために建築基準法で最低限のルールが決められています。

家の面積や高さを制限することで周りの家の日照や通風などを確保し、隣家や道路からの距離を保つことでお互いのプライバシーが守られます。しかし、この法律では建物の外観や、塀（へい）、物置、庭などの外構のデザインについては規定されていません。建て主は自分好みに自由に仕上げることができます。とはいえ、個性を重視し過ぎると「お隣りさんとは違うものにしたい」と思いがちです。こうした考え方は建物単体では個性の表現という意味で良いことでもありますが、街並みという視点では調和や統一感を損なう要因です。街並みは、通りに並ぶ一軒一軒の家や庭などで形づくられるもの。豊かで落ち着きのある街並みにするためには、周辺との調和を図る意識が一人ひとりに求められるのです。

色と物置について



かつての日本の家は建築資材が限られており、その地域の大工が施工していたので自然に統一感のある街並みが形成されていました。現代においても欧州では古い街並みはもちろん、新しい住宅街でも外観などが厳しく規制されています。建物と道路との距離には統一基準があり、外壁の素材や色彩も地区ごとに決まりがあるので、街全体が一つの個性を持った景観になっています。

現代の日本では土地に価値を見いだせても「建築は個人の一過性の持ち物にすぎない」との見方に対し、街並みも自然景観と同様に公益と考える欧州では「建築は文化の表現であると同時に、地域住民の公共物」という考え方が浸透しています。

日本でも2004年に景観法が制定され、「美しい景観が文化をつくる」という意識が高まっています。

より良い街並みへ 5つのポイント

家は一度建てると、その場所で何十年も存在します。

家づくりを考える場合、周囲に対してちょっとした配慮と協調性があれば豊かで調和のある街並みを育むことができます。

ここでは皆さんと一緒に誌面上の街を歩いて、家と街の関係について考えてみましょう。

1. 色

派手な色を外壁に用いた家を時々見かけます。

単体としてはきれいな色も、閑静な住宅街では場違いな印象を受けます。風水などから「自分のラッキーカラーを使いたい」と考える人もいますが、景観上好ましくない場合があります。

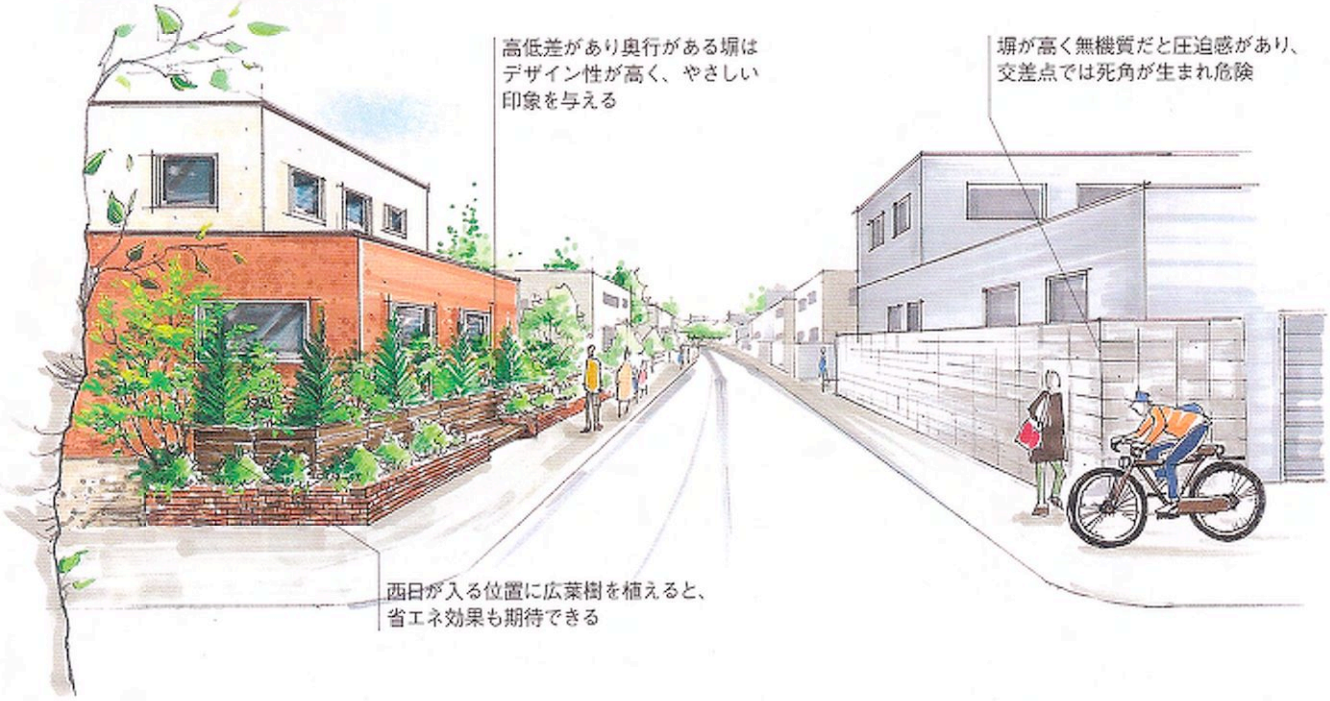
欧州の古い街でも国によっては外壁を赤や黄、青、中にはピンクに塗った家がありますが、不思議と違和感がありません。なぜでしょうか？これは絵を白いキャンバスに描く時の「図と地の関係」に置き換えて考えてみると分かります。描く絵は「図」、キャンバスは「地」です。

欧州の古い街並みは石造りなど建物の素材が同じで、しかも都市部では建物が密集しているので、連続性が生まれ真っ白いキャンバスのように一体感のある地が形成されます。そこにカラフルな色を描いても、浮き立つことなく逆にアクセントになりきれいに見えるのです。日本では建物同士が離れているので、そこに一軒だけ派手な外壁の家があると、唐突な印象を与えて違和感を覚えてしまいます。

原色系の色を使う場合は、この図と地の関係を利用して、玄関ポーチの柱やドアなどにワンポイントとして使いましょう。外壁は地になるので、落ち着いた色にすると、ワンポイントの色がより引き立ちセンス溢れる外観になります。明るい色を多く使う時は、彩度（色の鮮やかさ）を低くすると品のある表情になります。

このように色は街並みに大きく影響します。札幌市では「札幌の景観色」として70色を定め、街づくりのガイドラインとしています。これは札幌らしさをキーワードにしたさま

塀と植栽について



ざまな色で構成され、明るい色も彩度を低くするなどして落ち着いた色になっています。一度、参考にしてみましょう（http://www.city.sapporo.jp/keikaku/keikan/）。

2. 物置

雪が降る北海道では物置を建物の内部に組みこんで、内外から使えることが理想です。それができない場合は、スチール製の物置を設置するのが一般的ですが、隣家や道路際に無造作に置いてしまうと、せっかく美しく仕上げた外観は台無しです。

家の外壁と同じ素材にしたり、同色にすれば統一感が生まれます。また、植栽で隠せばより効果があります。

3. 外灯

夜、どの家にも外灯に明かりがなく、真っ暗な住宅街をよく見かけます。

こうした光景は冷たく寂しげに映るほかに、防犯上、危険です。電気代を節約したい気持ちは分かりますが、外灯は単なる飾りではありません。外灯から明りがもれていれば歩行者には安全で、しかも家族が帰宅した際、ほっとさせてくれます。

省エネ効果が高いLED（発光ダイオード）の外灯にしたり、夕暮れになると点灯し、明け方に消灯する自動点滅機能付きのタイプにすれば節減効果があります。外灯は温もりのある街並み、安らぎのある家にするには大切なアイテムです。

4. 塀

塀は外観上のデザインや防犯、隣家との境界をはっきりさせたい場合に設けるのが一般的ですが、外から中が全く見えないほど高くすると、泥棒が隠れやすく危険です。住宅街の狭い歩道に高い塀が迫り立っていると、交差点では塀によって死角が生まれ、特に目線が低い子供にとって危険です。

コンクリートやブロック塀は無機質で冷たい印象を与えます。生垣だと柔らかい印象になりますが、高過ぎると圧迫感が生まれ、剪定をこまめにしないと歩道にはみ出して通行の邪魔になります。

こうした場合は図のように、道路側の塀は低く、庭側の塀を高くすれば高低差と奥行が生まれ、その視覚効果から圧迫感がなく見た目にもやさしい印象を与え、しかも意匠性の高い塀になります。

5. 植栽

植栽には人の心を豊かにするだけでなく、外観や街並みに潤いをもたらす重要な役割があります。庭がなくても、玄関先にちょっとした鉢植えを置くだけで家の印象はがらりと変わります。

庭木の種類や植える位置を工夫すれば、省エネ効果があります。広葉樹は、冬は落葉し日差しが入り、夏は遮るので西日が入る位置に植えると冷暖房費を抑えてくれます。

さあ、次は実際に自分が住んでいる街を歩いてみてください。「落ち着きがあり心地よい」と思うのか、それとも「ちょっと違和感がある」と感じるのか―その理由を考えていくと、景観に溶け込んだ個性豊かな住まいが見えてきます。